

湖岸堤管理用道路志那北その2工区

志那湖底遺跡発掘調査概要報告書

——草津市志那中町地先所在——



1987・3

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

湖岸堤管理用道路志那北その2工区

志那湖底遺跡発掘調査概要報告書

——草津市志那中町地先所在——

1987・3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

埋蔵文化財は私たちの祖先が営んだ生活の痕跡であり、大地に残された歴史資料であります。

の中には、数千年もさかのぼる縄文時代から数百年前の江戸時代のものなど、いろいろな時代に、さまざまに生きた人たちの足跡が残されています。獣を追い求めた縄文人、新しく農耕をとりいれた弥生人、古墳を築いた豪族など、埋蔵文化財はあらゆる時代の歴史をさぐる不可欠の資料といえます。

現代は、私たちの祖先の歩んだ歴史の上に立脚しており、この歴史を認識することは、私たちの日常生活をより豊かにするものと思います。しかし、埋蔵文化財調査の成果を直ちに咀嚼して現在の生活に役立てることはそう容易な事ではありません。こうした調査や研究を地道に積み重ねることによってはじめて向的にも立体的にもその地域の歴史を再構成することができるのです。

ここに湖岸堤建設に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたのでご高覧に供したいと思います。この一書が私たちの生活に少しでも役だつ礎となれば幸甚です。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々ならびに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志 農 夫

例 言

- 1 本書は湖岸堤管理用道路志那北その2工区建設事業に伴う志那湖底遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの委託により滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会が調査機関として実施した。
- 3 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては東京湾の平均海面を基準としている。
- 4 本事業の事務局は以下の通りである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長服部 正、課長補佐田口宇一郎、埋蔵文化財係長林 博通、管理係主任主事山本徳樹

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長 南 光雄、事務局長中島良一、埋蔵文化財課長近藤 滋、調査一係長田中勝弘、技師奈良俊哉、総務課長山下 弘、主任主事松本暢弘、主事西田博之

- 5 本調査は奈良俊哉が担当し、本書の執筆、編集は奈良が行った。
- 6 出土遺物や写真、図面については滋賀県教育委員会で保管している。

目 次

序	
例 言	
第 1 章 調査の経過	1
第 2 章 調査の成果	2
1. 第 1, 2, 4 トレンチ	2
2. 第 3 トレンチ	4
第 3 章 ま と め	5

挿 図 目 次

図 1	60 年度発掘調査第 1 トレンチ全景
図 2	60 年度発掘調査第 1 トレンチ断面（西壁）
図 3	第 1 トレンチ発掘調査状況（上・中・下）
図 4	第 2 トレンチ発掘調査状況（上・中・下）
図 5	第 4 トレンチ発掘調査状況（上・中・下）
図 6	第 3 トレンチ発掘調査状況（上・中・下）

図 版 目 次

- 図版 1 周辺遺跡分布図
- 図版 2 遺跡位置図（明治36年度版地形図）
- 図版 3 トレンチ配置図
- 図版 4 第1トレンチ
（上）南壁断面
（下）第1トレンチ全景（南より）
- 図版 5 第2トレンチ
（上）南壁断面
（下）第2トレンチ全景
- 図版 6 第4トレンチ
（上）南壁断面
（下）第4トレンチ全景
- 図版 7 第3トレンチ
（上）西壁断面
（下）第3トレンチ全景
- 図版 8 第1トレンチ出土遺物
- 図版 9 第2トレンチ出土遺物
- 図版 10 第4トレンチ出土遺物
- 図版 11 第4トレンチ出土遺物
- 図版 12 60年度出土遺物
- 図版 13 60年度出土遺物
- 図版 14 60年度出土遺物
- 図版 15 60年度出土遺物
（上）60年度出土遺物
（下）61年度表採遺物

第1章 調査の経過

本報告は水資源開発公団が草津市志那中町地先で実施する、湖岸堤管理用道路志那北その2工区に係る埋蔵文化財志那湖底遺跡の発掘調査の概要を報告するものである。

今回の調査は草津市志那町の北側の湖岸部分にあたり、昭和60年度に試掘及び発掘調査の行われた地区である。昭和60年度の7月に行われた試掘調査では、現在樋門が建設されている部分より、縄文時代後期前葉の遺物包含層が検出されている。また引き続き行われた発掘調査では、樋門の北側にあたる湖岸堤部よりやはり同様の時期である遺物包含層が検出された。こうした一連の調査の中で遺物包含層が検出されると思われる部分が限定されたために、今回の発掘調査が行われることになった。

今回の発掘調査では、4カ所のトレンチを設定した。トレンチの大きさは40m×20mである。四周を鋼矢板で囲み、この中を、バックホー等の重機を用いて、上部掘削をしたのち、手掘り掘削により、遺物包含層を検出し遺構面を精査するという作業を

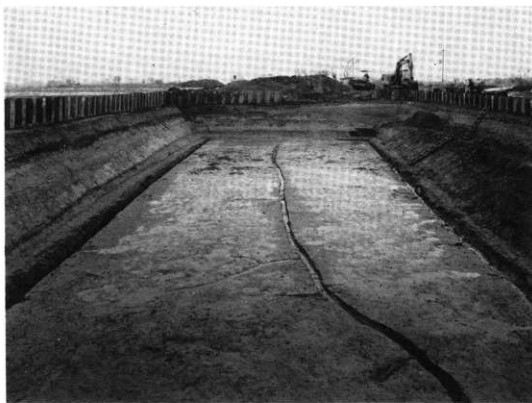


図1 60年度発掘調査 第1トレンチ全景

行った。今回設定したトレンチは便宜上調査の進む順番によって、第1・2・3・4トレンチとした。この中で、樋門部より南側で設定した第4トレンチは、昨年度の試掘調査の段階で、縄文時代後期前葉の遺物包含層がさらに南側に延びていくものであろうということからトレンチを設定した。第1・2・3トレンチは、昨年度行われた発掘調査の残りの部分にあたるものである。

発掘調査は昭和61年4月11日より行われ同年7月23日で現地調査が終了した。

第2章 調査の成果

1. 第1、2、4トレンチ

第1・2・4トレンチは、60年度に設定した調査範囲のなかでもやや南寄りで、湖岸に接した部分である。湖側にトレンチを設定したことや、60年度に掘削したトレンチの西隣りということもあって、第1トレンチでは東側の壁が崩壊するという事があった。第1・2・4トレンチは、ほぼ同様な堆積を示しているために、まとめて述

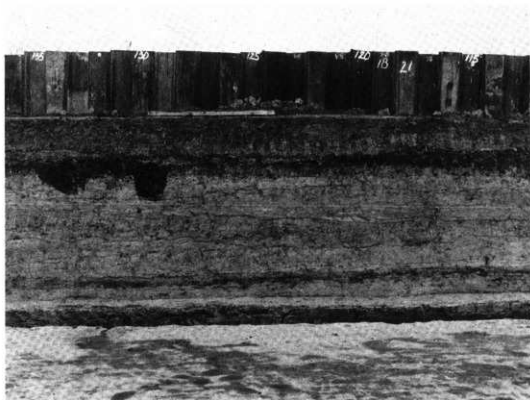


図2 60年度発掘調査 第1トレンチ断面(西壁)

べることにした。

(第一層) 盛土が約 1.8m 程積まれている。これはバックホー等の重機によって除去した。

(第二層) 青灰色粘土層。この層は、60年度の試掘調査の際に、中世と思われる時期の人形が出土している。この上面の高さは、標高で約 83.3m であり、現湖底面を形成している面である。60年度の発掘調査の際に、土塊と思われる落ち込み(図2)等が検出された面の高さとも一致しており、この上面で精査を行った。しかしながら、遺物、遺構とも検出されなかった。また、第二層を掘削中に、竹が地面に差したままの状態で検出された例があり、鼠の痕跡だと考えられた。この他では、貝殻や腐った植物の根などが第二層中には少量含まれていた。

(第三層) 淡黄灰色砂層。腐った植物の根が少量含まれていた。

(第四層) 暗茶褐色粘質土層。いわゆるスタモ層であり、腐った植物の葉が大量に含まれている。木器などの遺物は検出されなかった。

(第五層) 暗青灰色粘質砂層。第2トレンチの第三層にレンズ状に堆積している層である。第三層上面を精査中に面で確認したが、遺構となるものではなく遺物も検出されなかった。

(第六層) 暗灰色砂層。遺物は確認されなかった。多量の腐った植物の根が検出された。

(第七層) 淡黄灰色砂礫層。縄文時代後期



図3 第1トレンチ発掘調査状況

の遺物包含層である(図版8~11)。出土した土器は、そのほとんどが未整理なために明確な時期比定はできないが、60年度試掘調査や発掘調査の結果より(図版12~15)、縄文時代後期前葉にあたるものがそのほとんどを占めていると思われる。しかし、60年度の発掘調査では、縄文時代中期末の土器が出土していることなどから、第1・2・4トレンチで出土した縄文式土器も、中期まで遡るものが何点かあるかもしれない。

(第八層) 黄灰色粘質土層。縄文時代後期の遺構面と考えられたが、遺構は検出されなかった。

2. 第3トレンチ

第3トレンチは、湖岸堤管理用道路内の仮橋より北側約20m付近に設定したトレンチである。60年度の発掘調査では、四周の壁が崩れ、満足な調査ができなかった。このことより、今回は、上部盛土をあらかじめ、約60cmほど掘削してから打った。しかし、内部より地下水が噴出し、地面がめくり上がってしまい、危険な状態となった。このため、部分的に掘り下げて、層位の確認を行うのみにとどまった。

(第一層) 暗灰色砂層。腐った植物の葉が含まれている。

(第二層) 暗褐色粘土層。貝殻が混入していた。

(第三層) 淡黄灰色粘土層。多量の水分を

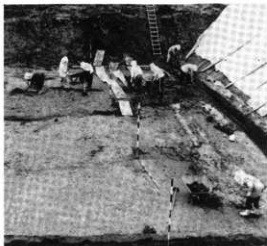


図4 第2トレンチ発掘調査状況

含む。

(第四層) 淡褐色砂層。多量の水分を含む。

(第五層) 暗褐色粘土層。いわゆるスクモ層である。遺物は含まれていない。

(第六層) 青灰色砂層。この層で、地割れが起きて、地下水が噴出した。このため、水揚げ場において下層の確認を急いだが、約1.5 m程堆積している様であり、下層は確認できなかった。

第3章 まとめ

今回の調査は、第一章でも述べたように60年度発掘調査の続きとして行われたものである。60年度の調査では、遺物包含層は検出されたが、遺構については確認できなかった。そこで、本年度の調査では、この点も考慮に入れてまず中世の遺構が存在するのではないかと思われる面から、除々に掘り下げて、面的な把握を行っていった。しかし、第二章の各トレンチの調査成果のなかで述べたように遺構は確認されなかった。特に、第3トレンチでは、大きな出水と地崩れがおきてしまい、満足な調査ができなかった。こうした調査成果のなかで、第4トレンチでは第七層にあたる黄灰色砂礫層から(標高81.5 m)縄文時代後期前葉を中心とした遺物が出土している。また、この包含層の下層にあたる暗青灰色砂層は、昭和60年度の樋門の試掘調査時点で縄文時代後期の遺構面ではないかとされた層であり、この2層が第4トレンチにおいてもほ

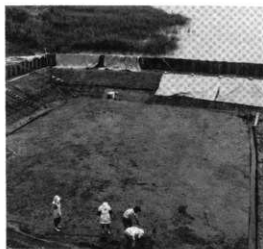


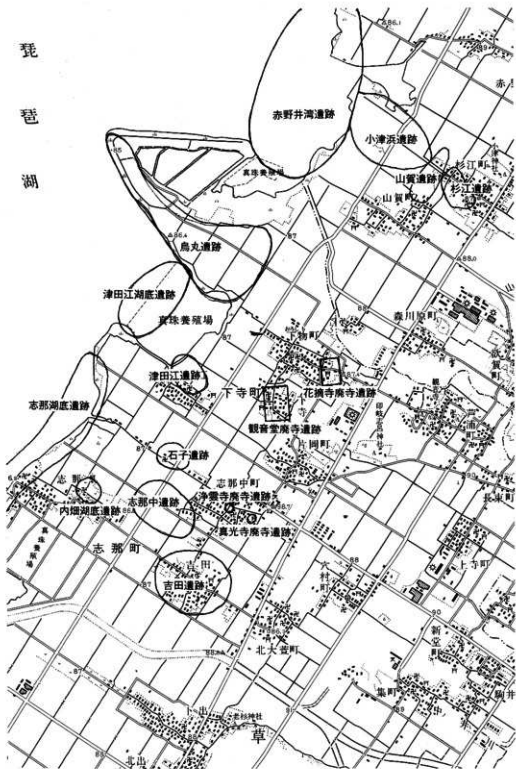
図5 第4トレンチ発掘調査状況

ほぼ水平に堆積している。遺物も第4トレンチ全体から、まんべんなく出土している。このことは、縄文時代後期前葉を中心とした遺物包含層が、南側にかなりの長さで広がっていくことを示すものであると考えられる。一方、北側は60年度の発掘調査より、湖岸堤管理用道路の仮棧橋手前約20mのところまで終結しており、層位的には黄灰色砂礫層が続くものの、遺物は検出されなくなっている。この地点から縄文時代後期前葉の遺物包含層が始り、極門より約40m南へ下っても、まだ続いていくもので南北に細長い遺物包含層であることがわかった。



図6 第3トレンチ発掘調査状況

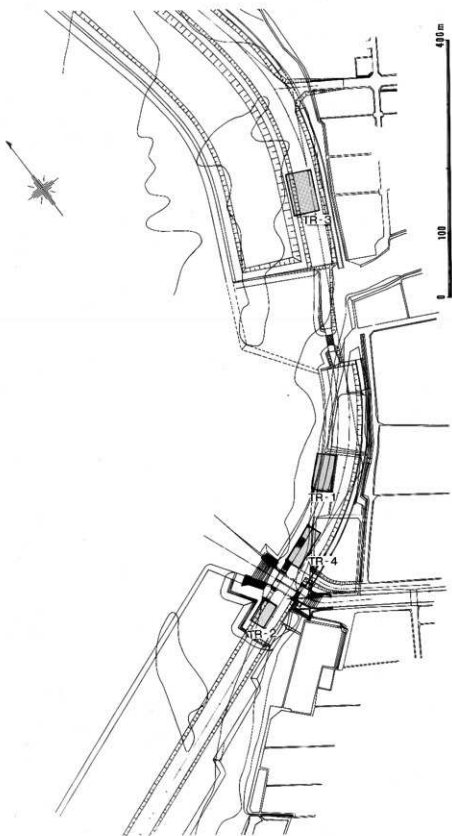
琵琶湖

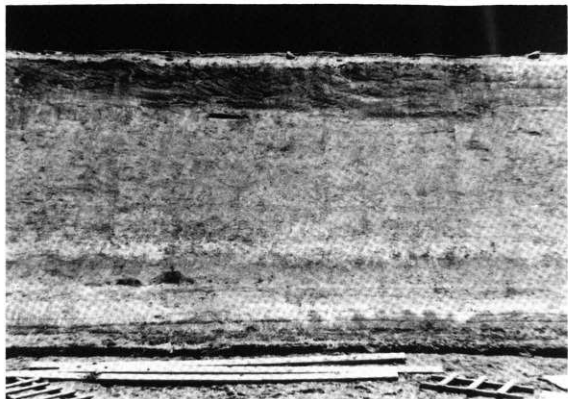


図版 2
遺跡位置図



図版 3
トレンチ配置図





南壁断面



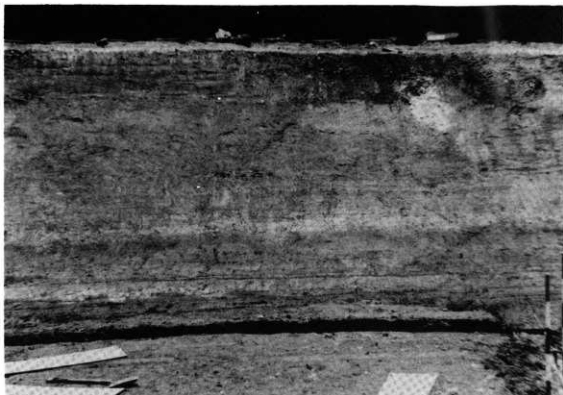
第1トレンチ全景 (南より)



南壁断面



第2トレンチ全景



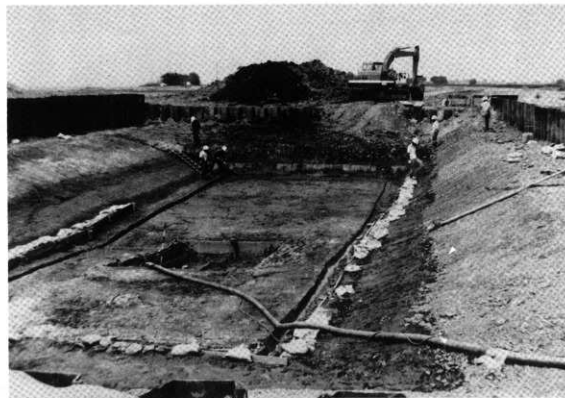
南壁断面



第4トレンチ全景

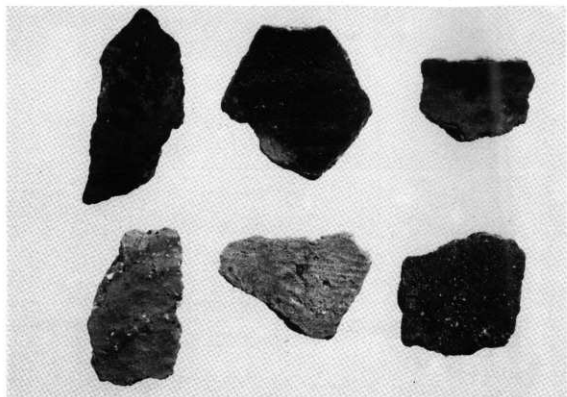


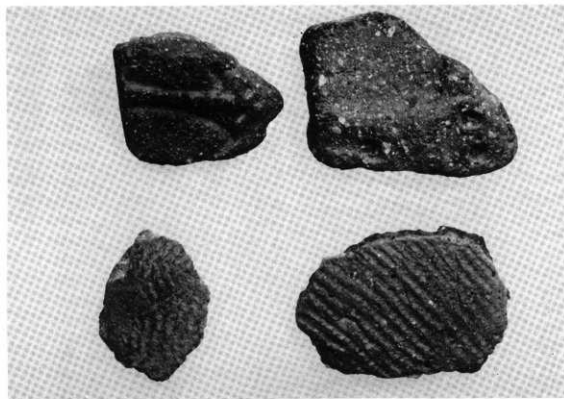
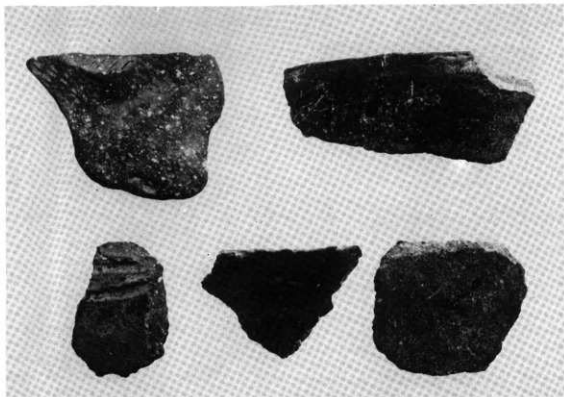
西壁断面

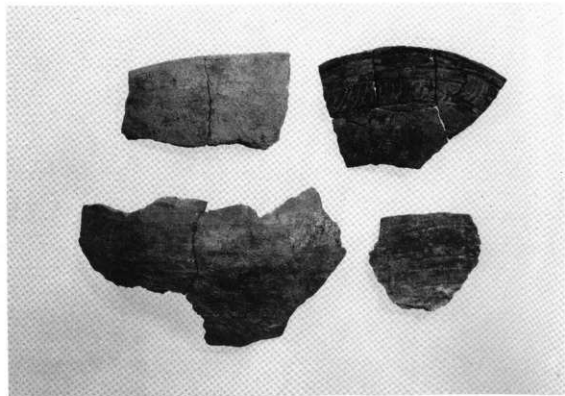
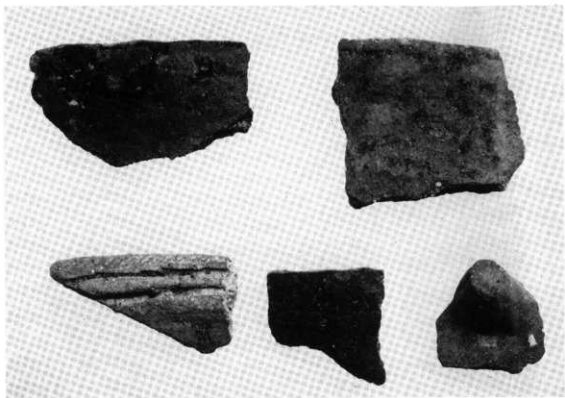


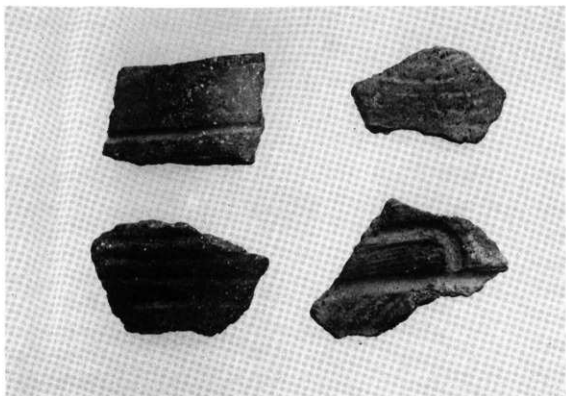
第3トレンチ全景

図版 8
第1トレンチ出土土遺物

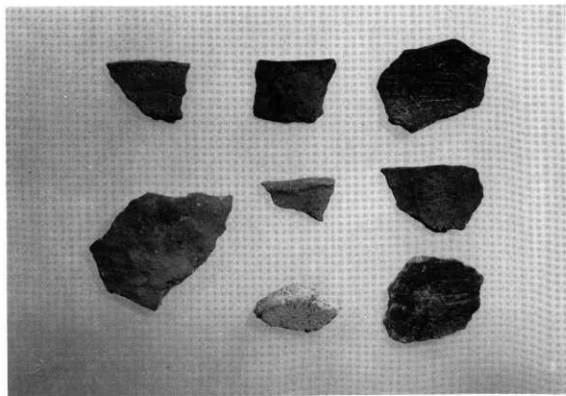
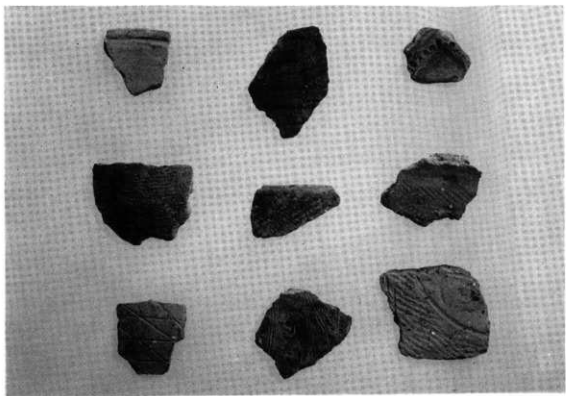


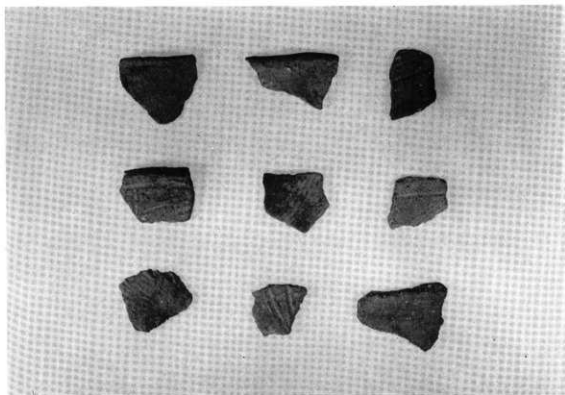
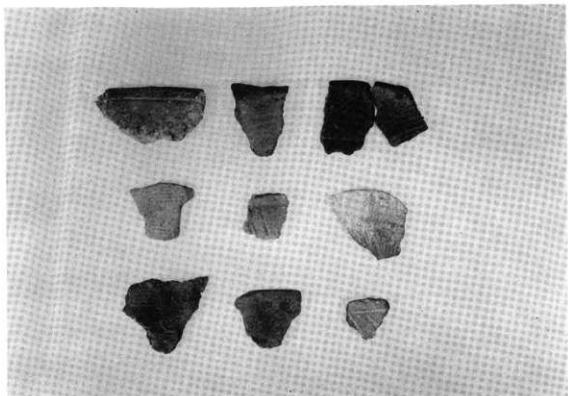




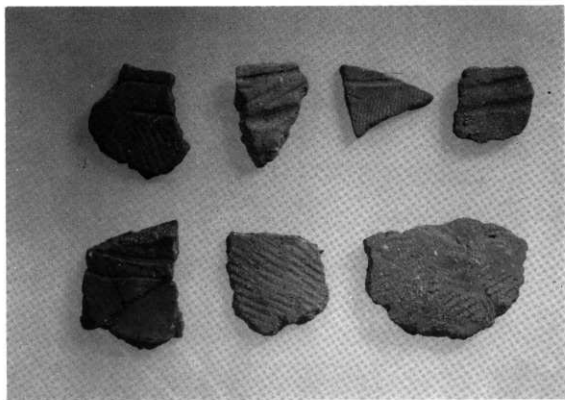


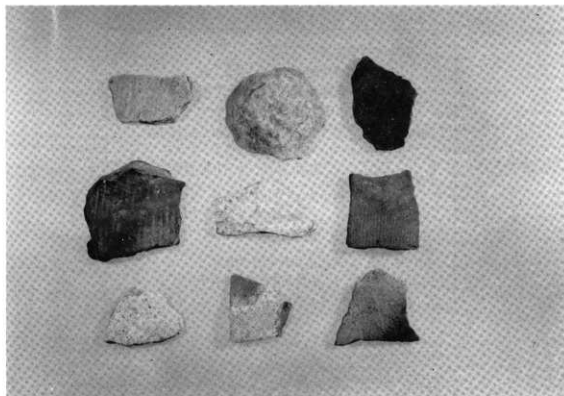
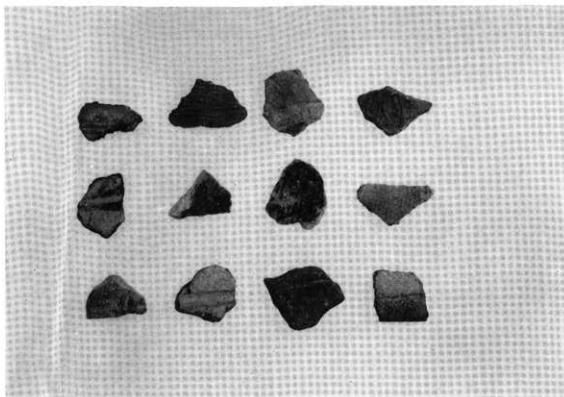
図版12
60年度出土遺物





圖版 14
60 年度出土遺物





昭和62年3月

湖岸堤管理用道路志那北その2工区
志那湖底遺跡発掘調査概要報告書
—草津市志那中町所在—

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課
大津市京町四丁目1-1
電話 0775-24-1121 内線 2536

助産資具文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話 0775-48-9781

印刷所 富士出版印刷株式会社
大津市札の辻4-20